生きる勇気が湧いてくる本

生涯をかけて愛と人生を見つめつづけた作家の珠玉のアフォリズム

藤周作

騎虎書房

生きる勇気が湧いてくる本

1996年11月18日　初版発行

著　者……遠藤周作

発行者……西村　真

発行所……株式会社騎虎書房

東京都新宿区西新宿2-6-1　新宿住友ビル40階

電話03(3343)5364　振替00160-6-17445

¥1300円

印刷・製本　大日本印刷株式会社

©ENDO SHUSAKU 1996 ISBN 4-88693-805-1　C0095

落丁・乱丁本はお取り替えいたします　Printed in Japan

無断転載・複製を禁ず

まえがき

加藤宗哉
（作家）

入院先の病室で、この本についての最終的な打ちあわせをしたのが、たしか夏の終りだった。六階の病室には遠藤周作先生と順子夫人がおられた。先生はベッドの上にいて、リハビリのあとの疲れた体をやすめていた。二ヵ月を越える入院生活で弱った足腰を回復させるためのリハビリ運動がはじまっていたのである。

この時点で、退院は九月に入った最初の木曜日、とすでにきまっていた。そのための準備も着々とすすみ、退院後に通うことになる人工透析の専門病院へも、奥さまは挨拶をすませておられた。

「秋のパーティーを楽しみにしているんですよ」

と本の打ちあわせが終って、奥さまが顔をほころばせた。退院したら

パーティーをやろう、と先生が言ってくれたのだ。のびのびになっていた文化勲章の御礼の会を秋になったら皆さんをお招きして開きたい、そのときはよろしく頼む……という先生からのハガキを、私も二週間ほどまえに受け取ったばかりだった。

だれもが希望をとりもどしていたのだ。先生が回復する。またみんなで飲んで、笑って、騒げる。

そして、回復する先生にまさにぴったりの新しい本が出る。

『生きる勇気が湧いてくる本』――。

なんていいタイトルだろうと思った。

私はこの本にふさわしいエッセイを集める作業を任せていただき、どこか晴れやかな気持で病院をあとにした。

その日から、私は選びだしたエッセイの文章をワープロに打ち込みはじめた。久しぶりに先生の文章を書き写す。ユーモアと、アイディアと、いたわり、やさしさが一行一行に浮かんできて、作業はいつになく楽しかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

しかし、退院は延期された。

退院予定日が近づいたとき、先生に微熱が出て、それがなかなか下がらないという。

医師側の意見は、とにかく熱の原因をつきとめ、それを退治してから退院ということにしましょう、ということだった。

病室をたずねると、先生は心なしかぐったりしていた。熱のためにリハビリも中止されている。微熱の原因は依然として判明しないようだったが、なかなか判明しないということは、逆に考えればたいした菌ではないということでもあった。それにしても熱がいっこうに下がらないことに、私は苛立ちとかすかな不安をおぼえた。

その間も、私は先生の文章をワープロに打ち込みつづけていた。そして気づくと、退院予定日からすでにひと月近くが経とうとしていたのである。

九月の終りに、『生きる勇気が湧いてくる本』は、最後の段階に入っ

ていた。最後は「老いと死」の章である。私はその項目にふさわしい先生のエッセイを書き写していた。テーマは、臨死体験。

〈キューブラー・ロスは二千五百人ほどの蘇生者にインタビューをした。蘇生者とは医師に「お亡くなりになりました」と宣告されて三分後、五分後にまた息を吹きかえしたような患者のことを言う。

「あなたは」とロス先生は一人、一人にたずねた。「息を吹きかえすまで、どんな体験をなさったのです」

この質問に蘇生者たちが答えた、二千五百にちかい回答が彼女の手もとに集まった。

ところが、その回答にはふしぎなことに共通したものが見られたのである。その共通したものを彼女は京都でスピーチした。……〉

以後の文章は本書のなかにあるので省略するが、それを書き写していたとき私のなかに浮かんだのは、十年近くまえの先生との会話だった。

「ロスの『死ぬ瞬間』を読んだかい、加藤」
「はい。読みました」
「そのロスがいま日本に来ていて、京都の学会で講演したんだがね。我々が死んだらどうなるか、というテーマでね。その講演録をきのう読んだ」
それから先生は丁寧に説明してくれた。
蘇生者たちの証言にあった三つの共通点とは何か。
ひとつは、死んだ者には自分の肉体（たとえばベッドに寝ている姿）が見えたこと。
二つ目は、死んだ者は、自分より先に死んでいった愛する人たちに会ったこと。
そして三つ目は、死んだ者は慈愛に充ちた光に包まれたこと。
つまり、こうした体験をしたあとで、死んだ者たちは息を吹きかえしたというのである。
そう説明してくれたあとで先生は感慨ぶかげに言った。

「こんな話を聞くとなあ、死ぬのがちっとも怖くなくなるだろう。とくにさ、自分より先に死んでいった愛する者に会えるというのは、いいなあ」

先生は周知のようにクリスチャンである。だから死後の世界は信じていただろうが、その先生にとっても、「死んでいった愛する者に会える」という蘇生者たちの証言はかなり魅力的だったにちがいない。以後、会う人ごとにその話を先生がしていたことからも、それはうかがえるのである。

そして先生の場合、死んでいった愛する者とは、一番に母親だろうと、あのとき私は思ったのである。自宅の居間にも、仕事場の書斎にも、夏をすごす軽井沢の家にも、古いお母さまの写真が飾ってあったのを私は見てきた。そして今回の入院の枕元にも、それは置かれていた。

そんなことを考えながらキューブラー・ロスに関するエッセイを写し終った日、私は御子息の遠藤竜之介さんからの電話を受けたのである。九月の終りだった。

先生が食事の際、食べ物を誤飲し、呼吸困難になったという。
私はすぐに家を飛び出した。病室に駆けこんでみると、先生はベッドの上で人工呼吸器を取りつけられていた。意識はほとんどないようだった。呼吸器の管から空気が吹きこまれるたびに、かすかな呻き声がもれ、先生の顔がゆがんだ。苦しいですか、先生、と私は毛布の上から先生の手をにぎった。それから自分にむかって心のなかで、意識がないのだから苦しいはずはないのだと言いきかせた。
それからの三十数時間は、あまりに長い。
そして、先生の自力呼吸はとうとう回復することがなかった。
翌日の夕刻、すっかり器具をはずされた先生の枕元に私は立った。さっきまで呼吸器の管をつけられて呻き声をもらし、ゆがんでいた顔はそこにはなかった。先生の顔は驚くほど静かだった。まるで美しい幸福な夢でも見ているかのようだった。
そのとき、私は不意に直感したのである。
「あっ、いま先生は、亡くなったお母さまに会っているぞ」

私自身のなかに深いどうすることもできない哀しみがやってきたのは、その後のことだった。

たくさんの〈生きる勇気〉を、私は遠藤周作という小説家からもらった。

……はじめて出会ったのは私が二十歳の学生のときだった。新宿の紀伊国屋書店の五階にあった「三田文学」編集室に、『沈黙』を書いたばかりの作家は、一年の期限付きの編集長としてあらわれた。そして私は、学校では何もすることがなく、暇つぶしに「三田文学」の走り使いをしていた、軽薄でいい加減な学生だった。

だがその日から、私の〈教室〉は三田文学の編集室となり、私の〈先生〉は遠藤周作になった。

以来、三十年がたつ。

幸運なことに、その間ずっと、私は先生の近くにいることができた。もったいないほどの人生の縁だった。いただいた電話、かけた電話の数

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

は、おそらく三十年分の日数に匹敵するだろうし、胸にきざんだ言葉、腹をかかえて笑った数は三十年分の時間に匹敵するだろう。とくに後半の十数年は講演や取材旅行にもたびたび御供できた。北海道から九州まで、先生と行けなかった土地はほとんどない。その折々に心に灼きついた先生の姿、表情、眼差し、そして優しさはあまりに多すぎる。

九州の宮崎へ行ったときのことだ。切支丹大名の大友宗麟の戦いの跡を追って、太平洋岸にそって北上し、耳川から日向、延岡と移動した。右手にひろがる海が、明るくのんびりとつづき、温かさに水平線さえ霞んでいるのを先生はずっと見ていた。そして夕刻、見晴らしのいい場所で車を止めると、先生はたまりかねたように言った。

「いいなあ。こういう暖かくてのんびりした海を見ていると、もう東京なんかに帰るのがイヤになるんだ。なあ加藤、そう思わんか」

私は先生と並んで立ち、海を見て言った。

「そうですか、ぼくはちっともいいと思いませんが。こんな穏やかな海より、日本海のほうがずっといいですよ」

先生は眼をまるくして言った。
「なに、太平洋より日本海のほうがいいのか」
「はい、問題になりません」
すると先生は首を少しかしげ、
「お前さんのクラいのは、変らんなあ」
と苦笑して、何か興醒めでもしたように海に背をむけ車に戻っていった。
以前にも私は何回か、加藤はクラいなあと先生から言われたことがある。その台詞を口にするときの先生は、困ったように、呆れたように、それでいてどこか愉しそうに笑う。しかし一度も、クラいのはやめろと言ったことはなかった。それはイカンぞとか、明るくなれとも言わなかった。
人間の性格は変わらない。それはいつも先生が言っていたことだ。私はその言葉どおり、ひらきなおっていたにちがいない。性格は変えようったって変わるものじゃない。自分はクラいままでいく。「マイナスを

プラスに」という先生の生き方に倣って、このクラさを活かそう。

……ただ、

と私はずっと昔の若い時代に考えた。

……人前でだけは明るく見せるようにしたいものだ。

先生は明るかった。

もちろん小説家だから別の一面もあるにはちがいないが、書斎を一歩出れば限りなく明るい。

先生の加わる席にはいつも笑い声が絶えない。持ち前のサービス精神で、次から次へとみんなを笑わせる。義理で笑う者などいない。どんなしかつめらしい顔をした人間も、腹の底から笑うのだ。つまり先生と会うと、だれでもが腹の底から笑える人間になる。

なぜだろう。

あのころ私が考えたのは、もしかすると人間には、相手の明るさを引き出すタイプと、相手のクラさを引き出すタイプの二つがあるのではないかということだった。その人間に会うと自分の良いところばかりが出

る、と感じるときもあるし、逆に、その人間に会うと自分の悪いところばかりが引き出されると感じるときもある。

つまり先生はあきらかに相手のいい面をつねに引き出すタイプだった。そして世の中には、もしかすると相手の悪い面だけを引き出すタイプも存在するのかもしれない。たとえば相手のクラさを、たとえば相手の激しさを、そして冷たさや悲観的な姿勢を——。

そう考えたとき、私は願ったのだ。遠藤周作のように、相手の良さを引き出す人間になりたい。相手の明るさを、相手の笑いを引き出す人間になりたい。……それならば少なくとも、人前でクラく見せることだけはやめよう。

しかし、九州で太平洋の明るい海を眺めたときのように、なぜか先生の前にでるとつい私は自分がクラい人間であることを強調したくなるのだ。あの困ったような、呆れたような笑い——それが私は見たかった。たとえ苦笑であったとしても、私はとにかく先生を笑わせたかったのかもしれない。

私が聞いた先生の最後の言葉は、亡くなる一週間ほど前である。病院を訪ねると先生は眠っておられた。私は順子夫人から先生のここ二、三日の様子についてうかがい、そのあとで、私から先生に報告したいと思っていたことを手短に申し上げた。先生の原作の映画が十一月にはクランク・インすること、そして主演の女優に十八歳の娘さんが決まったこと、そして『生きる勇気が湧いてくる本』の作業もほぼ終りに近づいていることを。

それから帰ろうとして、

「では失礼します、先生」

とベッドにむけて小さく挨拶したとき、先生がゆっくりと眼をあけた。

「加藤さんですよ」

と奥さまが言うと、先生は私のほうを見た。そして、

「あ、り、が、と、う」

と言った。

それは断じて――そう、断じて別れの言葉などではなかった。いつもの先生の、いつもの言葉だった。

もしそれが別れの言葉なら、それは私のほうこそが、万感の思いをこめて申し上げなければならなかった。だがその機会を私に与えぬまま、先生は突然、お母さんに会いにいってしまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.